

第2回「万葉集・明日香村」を中心とした授業づくりセミナー 概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇日時 令和3年7月10日(土) 10時~12時
◇場所 奈良県立万葉文化館とその周辺
◇参加者 村上(平城小)・藏前(真美ヶ丘第一小)・石田(佐保川小)
吉岩・川田・大竹(学生)
竹内・阪口・辻(万葉文化館)
中澤・米田・大西(奈良教育大) 計12名

◇内容 フィールドワーク「飛鳥における埋蔵文化財の調査と保存活用の実例」

飛鳥京跡苑池 → 飛鳥宮跡 → 酒船石 → 亀形石造物 → 飛鳥池工房遺跡

竹内主任研究員に案内していただき、最新の研究成果から得られる様々な知見について詳しく説明していただいた。

飛鳥京跡の保存と活用については、2014年3月に明日香村により策定された「飛鳥宮跡保存活用構想検討報告書」においてその方向性が示され、それをもとに奈良県が2018年3月に「飛鳥宮跡活用基本構想」をまとめている。2030年が飛鳥宮の最初の宮である飛鳥岡本宮造営から1400年にあたることを念頭に、宮跡の活用に取り組むことが求められている。

1. 飛鳥京跡苑池



飛鳥京跡苑池の遺構

国内初の本格庭園とされる飛鳥京跡苑池の発掘調査で、南北二つあった池のうち、北池の西岸が全て石積みの階段状護岸だったことが分かった。南池が少なくとも3つの石造物を有し、断面が皿状になる石貼りの浅い池で、中島や島状の石積みをもつなど観賞用という色彩が強いものに対して、北池は底が深く、底面も平らであるなど実用的な性格が強いものとなっている。とくに南池は庭園全体がわかる最古のもので、位置的にみても、すぐ東側にあった歴代の宮殿と密接に結びついた施設であると考えられている。

2. 飛鳥宮跡

これまで「伝飛鳥板蓋宮跡」として史跡に指定されていたが、これまでの調査・研究によって、舒明天皇の飛鳥岡本宮、皇極天皇の飛鳥板蓋宮、斉明天皇・天智天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇・持統天皇の飛鳥浄御原宮が重層的に営まれた遺構が確認されており、2016年に史跡の追加指定とともに、「飛鳥宮跡」に名称変更された。



飛鳥宮跡

3. 酒船石遺跡



酒船石



亀形石造物

酒船石は江戸時代から多くの仮説が唱えられ、酒を造る設備、あるいは薬などを造るための設備ともされ、諸説あるが定かではない。江戸時代に高取城を築城するため石垣用の石材として利用しようとしたと思われる石割用の石鑿の跡が見られ、上面の造形が欠損している。

亀形石造物は、1992年に酒船石の北の斜面で石垣が発見され、2000年に大規模な発掘が行われ、砂岩でできた湧水設備とそれに続く形で小判形石造物と亀形石造物が発見された。斉明期に最初に造られその後、天武・持統朝まで継続的に使用され、平安時代まで約250年間使用された形跡があり、何らかの天皇祭祀が行われた遺構と推定される。

これらの遺構は石造物を中心として石敷や階段状石垣などによって立体的な空間を作り出している。遺構には多くの砂岩切石が使われており酒船石遺跡は、『日本書紀』にみえる「宮の東の山の石垣」、「両槻宮」との関係が指摘されてきましたが、今回の遺構はそれらをさらに補強するものである。

4. 飛鳥池工房遺跡（万葉文化館内）

金属製品やガラス製品などを作ったときに出るごみが大量に見つかった。その中には富本銭を作ったときの道具やごみが含まれていた。それらを作る炉がたくさんある。そこにごみを沈めて水をきれいにするための「水ため」が、棚田のように連なっている。遺構展示にあたり、本来のものは埋めてその上に展示を行うが、20年も経過すれば表面が劣化してきたり、苔が生えてきたりすることが、どの遺構展示においても問題である。



飛鳥池工房遺跡

【まとめ】

竹内研究員のお話から印象深かったのは、明日香村に多く残る石造物はその用途や意味など分からないことが多く、これまで「古代のロマン」として位置づけられてきたが、この20年ほどで様々な研究の積み重ねから科学的な知見のもとで語られるようになってきたことである。世界遺産登録を目指していることもあり、「よく分からないもの」から、学術的にきちんと価値づけられたものにする必要があるという視点が興味深い。

※次回予定

10月23日（土）10時～12時 授業構想案の検討